

|         |                                                                  |
|---------|------------------------------------------------------------------|
| 氏名(本籍)  | 岡田雄樹(神奈川県)                                                       |
| 学位の種類   | 博士(体育科学)                                                         |
| 学位記番号   | 甲第58号                                                            |
| 学位授与年月日 | 平成27年3月10日                                                       |
| 学位授与の要件 | 日本体育大学学位規程第5条の学位は、大学院学則第29条の規定により、大学院研究科博士後期課程(博士課程)を修了した者に授与する。 |
| 学位論文題目  | ゴール型ボール運動における教材開発に関する研究<br>—スリーサークルボール教材を中心に—                    |
| 審査員     | 主査 教授 関根正美<br>副査 教授 久保健<br>副査 准教授 近藤智靖                           |

### 論文審査結果の要旨

本論文は上記題目の主論文ならびに関連論文3編をもって提出され、審査に付された。

本論文の概要は以下の通りである。

本論文は近年の体育授業が目指す方向である「学習内容の豊かな習得」を目指すためには教材づくりが重要なのではないかとの問題意識のもとに行われた。研究の目的として、学校教育における教材概念の歴史の変遷を明らかにし、そこで得られた教材概念を軸としてゴール型ボール運動における教材を開発・検討することが設定されており、その目的に応じて七つの研究課題が抽出され、全七章で構成されている。

第一章及び第二章では一般教育学と体育科教育学における教材概念の変遷を明らかにすることで、体育科教育学における「教材」概念の概念規定がなされた。それによれば、体育科教育学においては、1980年代以降にそれまで混沌としていた「教材」概念が一般教育学の影響を受けつつ「学習内容」との関係において明確化されてきた。特に「学習内容」、「教材」、「素材」の概念を明確化した岩田(Y. Iwata)の理論的立場の重要性が明らかにされた。

第三章ではボール運動の授業についての課題が明らかにされ、課題が明確でしかも効率的に学習できる下位教材開発の必要性が明らかにされた。

第四章から第七章にかけてはゴール型ボール運動のうち、スリーサークルボール教材について教材の開発ならびに検討が行われた。スリーサークルボール教材はミニバスケットボールの約半分のコートを使用し、身体接触とドリブルを禁止することで児童が「得点しやすい場所に移動し、パスを受けてシュートすること」を経験できるようにした。その結果、小学校学習指導要領解説体育編の内容に記載されている「ボールを持たないときの動き」の習得に有効に機能することが確認された(第四、五章)。しかしこの教材は、ゴール型学習において重要である「シュート局面」および「攻守の切り替え」学習には寄与しなかった。そこで、さらに「ハーフコートサークルシュートゲーム」を開発し有効性を検討した結

果、「ボールを持たない時の動き」および「シュート局面での状況判断」に有効であることが示唆された(六章)。また、オールコートスリーサークルボールを開発し、その有効性を検討した結果、「ボールを持たないときの動き」や「切り替え時のサポート」、「切り替え時の状況判断」の質が向上した(第七章)。

結論は以下の通りである。教材概念を整理することにより「学習内容」の概念と「教材」概念が明確に示され、教材作りの方略が示されることになった。この教材概念を背景にしてゴール型ボール運動の教材開発を試みた結果、スリーサークルボールの教材としての有効性が確認された。

以上の論文に対して審査を行った結果、以下の通りとなった。

体育学において教材概念の不明瞭さならびに概念の明確化については従来より指摘されてきたものの、未だ確固たる結論が得られていない状況の中で、本論文は教材概念の歴史の変遷を検討しながら概念の明確化を図った。そしてここで得られた教材概念を文献研究に留めることなく、具体的なスリーサークルボールという教材開発ならびに有効性の検討を通して、体育学における教材開発に新たな道筋を開いた。このことは本論文独自の着眼点及び知見であると認められ、体育学とりわけ体育科教育学の分野に学術面で寄与することが期待される。研究方法については、文献の解釈は妥当かつ精密になされていることが確認された。また、教材開発研究においては綿密に研究が計画され、データに基づいて信頼度の高い客観的な結論を導き出しており、学校体育の授業改善に向けた知見を提供するものと評価できる。

最終試験においては、論文の方法ならびに内容に関して審査員からの質問に的確に答えている。本論文に対して、審査員からスリーサークルボール以外の実践研究へのさらなる展開への期待と教育学的な広い視野で教材作りを検討することの課題が示されたが、いずれも今後の課題としての指摘であり、本論文の価値を損なうものではない。

以上のことから、審査員は本論文を博士論文として全員一致で「合格」と結論づけた。

## 最終試験結果の概要

本論文は、体育学において従来より指摘されてきたものの、未だ確固たる結論が得られていない教材概念の明確化について、その歴史の変遷を検討しながら概念の明確化を図った。そしてここで得られた教材概念を文献研究に留めることなく、具体的なスリーサークルボールという教材開発ならびに有効性の検討を通して、体育学における教材開発に新たな道筋を開いた。このことは本論文独自の着眼点及び知見であると認められ、体育学とりわけ体育科教育学の分野に学術面で寄与することが期待される。

最終試験においては、論文の方法ならびに内容に関して審査員からの質問に対してすべての的確に答えた。今後の課題として、審査員からはスリーサークルボール以外の実践研究へのさらなる展開への期待が示されたが、この点は本論文の価値を損なうものではない。

以上のことから、審査員は本論文を博士論文最終試験結果として全員一致で「合格」と結論づけた。